

「ザカリヤとエリサベツ」

ルカの福音書 1:1~7

はじめに

今日からルカの福音書を読み解いてまいります。これに取り組もうと決意し、学び始めていきなり驚かされたことがあります。それはこのルカという人物がユダヤ人ではなく、ギリシャ人つまり異邦人であったというのが定説となっていることです。私はこれまで聖書はすべてユダヤ人によって書かれた、と思っ込んでいましたので、これには軽いショックを受けました。もちろんこれに異論を唱える方もおられますが、私が調べたところによると異邦人説の方が有力なようです。ですから筆者が異邦人なのに、これをヘブル語で考察して良いものかと思案しました。しかし彼についていろいろと調べてみますと、ルカは使徒パウロの忠実な同労者で、パウロはルカを「愛する医者(コロサイ 4:14)」、「私の同労者(ピレモン 24)」と呼んでいます。ルカは謙遜な人で、自らを背後に隠して、イエス・キリストが主であり、救い主であることと、この主が弟子たちを用いて福音を全地にもたらしたことに光を当てています。またルカは教養のある人で、福音書の初めに述べているように、あらゆることを初めから綿密に調べて、順序立てて書くことのできた人でした。また彼は医者として、事実を正確に見る訓練ができていましたので、彼の歴史の記述は信頼し得るものと言えます。そして彼は異邦人であったというのが定説ですが、彼が生粋のユダヤ人であり優れたパリサイ人でもあったパウロと常に行動を共にし、これに着き従う中でそのヘブル的思考、ユダヤ人の聖書知識からの影響を大いに受けていたと考えられます。そして何より私たちの神はイスラエルの神であり、イエシュアはユダヤ人の王であることに、何ら変わりはありません。というわけで多少の不安はありますが、ルカの福音書のヘブル的考察を始めさせていただきます。

1. 調べる

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:1 2 私たちの間で成し遂げられた事柄については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人たちが私たちに伝えたとおりのことを、多くの人がまとめて書き上げようとすでに試みしています。

1:3 私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬するテオフィロ様、あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。

1:4 それによって、すでにお受けになった教えが確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います。

ルカがテオフィロという人物に宛てた個人的な書簡、それがこのルカの福音書の発端です。つまりこの書の始まりは、大々的に公布され、広められることを前提として書かれたものではなく、テオフィロというたった一人の人に対する手紙のようなもの、つまり非常に小さなものであったということです。しかしそれは聖書の一部として編纂され、やがて国と世代を越えて非常に多くの人々に、そして今日の私たちにまで及ぶものとなりました。私はこの序文から励ましを受けています。なぜなら今私がしている働きも、当初のルカと同じく非常に小さなものだと感じるからです。今日ここに集められている人数は本当にわず

かです。しかしこのルカの書簡がそうであるように、「私も、すべてのことを初めから綿密に調べていますから、尊敬する…あなたのために、順序立てて書いて差し上げるのがよいと思います。」今集められているみなさんのために「あなたのために」そうすることによって、これまでもそうであったように、「すべてにお受けになった教え」すなわち聖書の福音が「確かであること」、信すべきものであること、真実、事実であることが、やがて国と世代を越えて伝播していく、広がっていくと信じて主を讃え、また感謝しつつ語ってまいりたいと思います。

ここでルカはこれから自分が述べることについて「すべてのことを初めから綿密に調べています」と言っています。ヘブル語で「調べる」ことをハーカル(קָרָה)と言いますが、それは本来このように用いられました。

申命記【新改訳 2017】

13:12 もしあなたの神、【主】があなたに与えて住まわせる町の一つで、

13:13 よこしまな者たちがあなたのうちから出て、「さあ、あなたがたが知らなかったほかの神々に仕えよう」と言って町の住民を迷わせたと聞いたなら、

13:14 あなたは調べ、探り、よく問いたださなければならない。もしそのような忌み嫌うべきことが、あなたがたのうちで行われたことが事実で確かなら、

13:15 あなたはその町の住民を必ず剣の刃で討たなければならない。その町とそこにいるすべての者、その家畜も剣の刃で聖絶しなさい。

これはイスラエルに対する偶像礼拝の罪に対する規定で、それをそそのかす者、行う者を「調べ、探り、よく問いたださなければならない」とあり、ここに聖書で最初のハーカルがあります。そしてそれは「聖絶」すなわち偶像礼拝を完全に取り除くことを目的としています。私はこのハーカルの本来の意味から、この書をどのように読み解かなければならないか、ということの重要な示唆を受けました。それは偶像礼拝、すなわち人によって作り出された、人の願望や欲求を満たすもの、つまり人間中心的な思いや考え、視点を「聖絶」完全に取り除いた形で読み解くということです。今日聖書は私たち人の歩み、生き方をより良くするもの、そして幸せで成功的な人生を送るための教科書、ガイドブックとして広く用いられています。聖書の御言葉を握って人生が変えられた、成功した、癒された、守られたという証言があふれ、今や聖書は多くの人々の中で、人の願望をかなえるための道具に成り下がっています。しかし本来聖書とは、「人が」ではなく「神が」すなわちその「御子イエシュア」がどのような御方であり、そして何を成し、また何を成そうとしておられるのか、という神の御心、神の願望、神の熱心「神のご計画」を記したものであるのです。ある熱心なクリスチャンがこう言います。「私は神に喜ばれる、神の御心を行う人になりたい」そう言って聖書からそのための方法を必死に得ようとしています。この考えは一見すばらしいもののように思えますが、その根底にある思いはやはり、誰より何より「自分が」「自分は」こうしたい、ああなりたいという人の願望、欲求です。こういう考え方は、実は聖書自体が自分の欲求を満たすための偶像になってしまっているのです。ですから私はこれから「調べ、探り、よく問いただ」し、聖書の中から今述べた偶像、偶像礼拝、人間中心的な考えを取り除く、聖絶する思い、姿勢すなわち神のご計画の視点でこのルカの福

音書に取り組んでまいります。「あなたのために」、神の御心、神のご計画が「確かであることを、あなたによく分かっていただきたいと思います」。

2. 祭司の王国

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:5 ユダヤの王ヘロデの時代に、アビヤの組の者でザカリヤという名の祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといた。

1:6 二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた。

1:7 しかし、彼らには子がいなかった。エリサベツが不妊だったからである。また、二人ともすでに年をとっていた。

筆者ルカの述べる「すべてのことを初めから綿密に調べて…順序立てて書いて」いくその初めは、ザカリヤとエリサベツという祭司の家系の二人、夫婦についての記述から始まります。彼らは「神の前に正しい人」でしたが「子がいなかった」、妻が「不妊だった」そして「すでに年をとっていた」という特徴が記されています。これらの特徴を聞いて、思い出すべき人物がいます。それはもちろんイスラエルの父祖、アブラハムとその妻サラです。神の民イスラエルの歴史は、彼らの存在がまさにその「初め」です。つまりそれは神がイスラエルという民を通して成し遂げられる「神の国」のご計画の「初め」であり、神がそのアブラハムとサラを指し示す「型」として、ここにザカリヤとエリサベツの存在を記させたのです。

そしてこの二人が祭司、またその家系に連なる者であることも重要な意味を持っています。こう記されているとおりです。

出エジプト記 19:6【新改訳 2017】

あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。』

アブラハムの子孫であるイスラエルの民は、神の「祭司の王国、聖なる国民となる」という神のご計画がこのザカリヤとエリサベツには表されているのです。さらにザカリヤは「アビヤの組」の祭司であったことが記されています。これはダビデ王の時代に制定された、大祭司アロンの子孫たちで構成される二十四組の祭司たちの一つで、アビヤはその第八番目の組です（I 歴代誌 24:10）。古くからユダヤ人たちはこの「八」という数に特別な意味を見出していて、それは「新しい始まり、新しいいのち」という意味です。ですから今のこの世、この時代が過ぎ去り、新しい時代において、新しいいのちを得て、イスラエルは復活し「祭司の王国、聖なる国民となる」となることがここには表されているのです。そしてそれは同時に、神の御子イエシュアが、天から降りて来られ、イスラエルの、ユダヤ人の王となられる時にそれはなるということも表されています。

3. ヘロデの時代

「ユダヤの王ヘロデの時代に…」これは単なる時代、時間の説明というだけのものではありません。なぜこの時代、なぜヘロデがユダヤ人の王であった時代にザカリヤとエリサベツは置かれた、生かされたのでしょうか。そしてここから始まる一連の出来事もまた、なぜこの時代だったのでしょうか。それは偶然、たまたまではなく、またべつにいつでも良かったというものでもありません。聖書のすべての事実には必ず意味があるのです。ヘロデ(סְרוּדִיָּה)という名はギリシャ語名ですが、これをヘブル語で表記するとこのようになり、するとそこに「降りる」という意味のヤーラド(יָרָד)という言葉が隠されていることがわかります。その最初の言及はこうです。

創世記 11:5【新改訳 2017】

そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

このようにヤーラドとは本来、神である主が、人の住む町すなわちこの地に、天から「降りて来られ」ることを意味する言葉なのです。つまり「ユダヤの王ヘロデの時代に」という一見ただの状況説明、時代設定のように思えるこの御言葉の中には、主がこの地上に降りて来られ、ユダヤ人の王となられる時、その時代において、という意味が表されているのです。そしてその時アビヤの組の祭司ザカリヤとその妻エリサベツの存在に示されたアブラハムの子孫であるイスラエルの民は、「祭司の王国、聖なる国民となる」ということが、そのような神のご計画が、ここには表されている、秘められているのです。このように、書き始めのわずか数行でこの書は、神のご計画の完成、結末、その最も重要な部分をすべて表してしまっているのです。これはもちろん筆者ルカの意図したことではなく、まさに神が意図され、彼にそのように書かせたと云わざるを得ません。

4. 正しい人

ザカリヤとエリサベツについてのこの記述は、やがて御子イエシュアが王として天から降りて来られる、地上再臨され「神の国」が建てられる時の、イスラエルの「型」です。ですから彼らが「神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた」というこの表現もまた、その時に成就されるものです。しかし多くの人はこの御言葉をはき違え、今の自分にそれを当てはめようとし、正しくありたいと願ひ、正しくなろうと努力し、神の命令に従おうと頑張っておられます。しかしその結果はどうでしょうか。信仰生活が何十年という人であっても、同じ過ち、同じ失敗、同じ罪をいつまでも何度も繰り返しているのではないのでしょうか。この御言葉を今の自分に当てはめようとするならば、そこには失望、落胆しかなく、本来良い知らせ「福音書」であるはずの御言葉が、逆に私たちを悩ませ、苦しめるものになってしまっているのです。これはなんと残念で悲しむべきこと、由々しき事態でありましょうか。神のご計画の視点で聖書を、御言葉を捉えること、それが私たちをその事態から解放します。神は私たちに対して「今すぐそれをせよ。」と命じておられるのではなく、神ご自身が「わたしがそれをする、必ず成し遂げる」と約束しておられるのであり、それが聖書の御言葉となっているのです。ですからあなたがあなた自身によって、人が人によって神の前に正しくなるのではありません。また今の世でそれが成されるのでもありません。新しい時代、新しいいのち、「神の国」において永遠のいのちを得たあかつきにそれが実現されるのです。

5. 誓い

そしてザカリヤとエリサベツが「**神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた**」
というこの記述は、アブラハムに対する以下の御言葉を指し示しています。

創世記【新改訳 2017】

22:15 【主】の使いは再び天からアブラハムを呼んで、

22:16 こう言われた。「わたしは自分にかけて**誓う**——【主】のことば——。あなたがこれを行い、自分の子、自分のひとり子を惜しなかつたので、

22:17 確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように大いに増やす。あなたの子孫は敵の門を勝ち取る。

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。」

イスラエルの父祖アブラハムのこの行為によって、彼がまさに「**神の前に正しい…主のすべての命令と掟を落度なく行っ**」たことにより、神はすでに、ご自分にかけてこのように誓われたのです。それは他の誰によってでもなく、神である主ご自身がその誓いを果たされるということです。このようにザカリヤとエリサベツについての「**神の前に正しい人…**」というこの表現は、上記のアブラハムの行為と、それによって神が誓われたその内容を指し示したもののなのです。神は決してこの誓いをお忘れになりません。なぜならザカリヤ(**זַכְרְיָהוּ**)とは、「主は『覚える、ザーノル(**זָכַר**)』」という意味で、エリサベツ(**אֵלִישֶׁבֶט**)にいたっては「神は『誓う、シャーフア(**שָׁפַע**)』」という意味を持っているからです。神はアブラハムに対して、**ご自分にかけて誓われたこの誓いを覚えておられ、決してお忘れになることはありません。**その事実が、彼らの名がザカリヤとエリサベツであった理由です。このように、聖書の記述にはすべて意味があるのです。

6. 祝福

ザカリヤとエリサベツ、この二人の記述に表された、イスラエルの父祖アブラハムに対する神の誓い、神の約束、神のご計画、それはアブラハムへの選び、そして誓いに始まり、その子孫イスラエルの民を用い、結末として「**地のすべての国々は祝福を受けるようになる**」というものです。神はご自分の計画をこのように、まさに「**すべてのことを初めから…順序立てて書いて**」、これを示しておられるのです。

私たちが受けるべき神からの「**祝福**」、それは神のご計画の結末、完成時に初めてもたらされるものであり、私たちはまだ誰もこれに与ってはいません。私は毎週礼拝の最後に祝祷、祝福の祈りをしていますが、それは今週一週間のうちに与えられるものではありません。「神の国」において、イエシュアを王とするイスラエルを通して与えられるものなのです。そしてそれは今日の私たちが軽々しく、祝福と呼んでいるものとは到底比較にならないほど壮大かつ永遠のものです。

アブラハムの子イサクの子ヤコブは十二人の息子に恵まれ、多くの財産を所有しました。しかし彼は自分の生涯を振り返り「いろいろなわざわい（創世記 47:10）」と表現しています。栄華を極めたとされる王ソロモンも「見よ、すべては空しく風を追うようなもの（伝道者 1:14）」と言っています。さらにこの福音書の筆者ルカに多大な影響を与えたパウロ、彼は誰よりも聖書全体の真理に精通した者であったと言

われていますが、そんな彼も「私は本当にみじめな人間です（ローマ 7:24）」と言っています。つまり、私が言いたいのは「今ではない」ということです。東進ハイスクールの林修先生は「今でしょ！」と言っておられますが、私たちが見るべきは、今ではありません。

ヘブル人への手紙 11:13【新改訳 2017】

これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。

今私たちは、神からの祝福、「約束のものを手に入れることはありません」。今は「はるか遠くにそれを見て喜び迎え」る時なのです。しかしアブラハムの時代には確かにはるか遠くであったそれも、今日の私たちは、彼よりもずっとその近くにいます。まさに「神の国が近づいた（マルコ 1:15）」と言われているとおりです。今日よりも明日、今週より来週、そして今年よりも来年、「神の国」のその祝福は確実に近づいています。それでは来年もともに、御国を待ち望んでまいりましょう。